

2 章 位置と環境

1 位置

鳥取県東伯郡三朝町は鳥取県のほぼ中央部、岡山県との県境に位置し、東西約24km、南北約19kmで総面積233.52km²の広大な地域を有している。周辺を山地に囲まれ、町域の約9割を山林原野が占めていて、狭あいな谷間に沿って集落が点在している。

山岳霊場としての三徳山は旧国単位で見ると伯耆国に位置し鳥取県を構成する伯耆国と因幡国、これに岡山県側の美作国との三国境に位置している。三朝温泉からは東に約7km、日本海から南に約15kmの位置に所在する山頂を中心にして、三徳川と小鹿川が形成する溪谷、溪流から構成される。

2 地形・地質と植生

山塊としての三徳山は標高899mを最高点とするものの、独立した高峰ではなく、800mクラスの尾根稜線が2km近くにわたって続くのに加え、主稜線からは南北方向に多数の支尾根が派生し、その間には浸食を受けてえぐられた細かな谷地形が連続している。主尾根稜線北面には三徳川が流れて幅の狭い三徳谷を形成し、南面には小鹿川が流れて、やはり幅の狭い小鹿谷を形成するので、山麓から直接山頂部を望むことは難しく、「見えない山」というのが特徴となっている。三徳山山頂から北面の三佛寺側に延びる尾根の稜線は「行者道尾根」と呼ばれ標高約500mから下の裾部は三佛寺境内となっているが、奥之院蔵王堂（投入堂）から上部には、人工的な施設を設けず自然植生が護持されている。

図6は三徳山山頂部をまたぐ南北方向の地質構造模式図に主要な遺跡の位置と特徴的な植生を示したものである。三徳山は約300万年前に噴火してできた山で、粘り気の強い溶岩が噴出して周りへ流れ、最後に中央部が冷えて固まり溶岩円頂丘ができる。その後、浸食が進んで現在の尾根と深い谷が連続する地形が形作られている。

地質は標高900mから中腹の600mまでは硬い安山岩に覆われ、その下には軟らかい凝灰質角礫岩が堆積するので浸食が進み、深い谷が刻まれて中腹から山麓にかけては急傾斜の谷、鋭い稜線の尾根、断崖、奇岩が集中する。安山岩層と凝灰角礫岩の境目では特に浸食が激しく、洞窟状に抉られるので、そこに奥之院蔵王堂（投入堂）を始めとする岩屋群が設けられている。

南面の神倉側でも湯地点遺跡群は小鹿凝灰角礫岩の上部に営まれ、冠巖は花崗岩層との境目にできた断崖である。

植生に注目すると標高899mの山頂から、奥之院蔵王堂が設けられた520mまでは、明治以後に植林が行われるまではブナ準林が覆う神仏常住の聖域であり、そこには仏堂など一切の人工構築物が設けられることはなかった。520mより下の範囲では浸食を受けやすい凝灰角礫岩層となり、そこには断

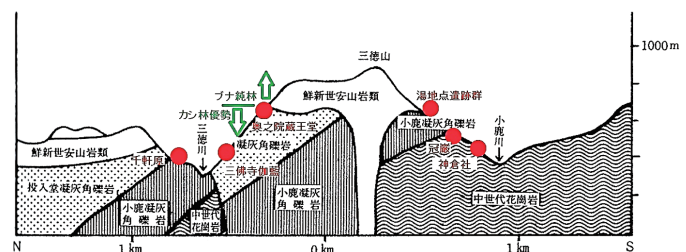


図6 三徳山の地質構造と植生・信仰遺跡の関係

松本達之「三徳山の自然と景観」に加筆引用

主な宗教施設が設けられる場所の選定には地質（岩質）と植生の変化点が密接に関わっていることが見て取れる。三徳側では奥之院蔵王堂の位置は固い安山岩と柔らかな凝灰角礫岩との境目にできた洞窟を利用し、そこから山頂までは、植林が行われるまではブナ純林となっていて、一切の人工物を設けない神仏常住の空間であった。そこから下部は浸食を受けやすい凝灰角礫岩で奇岩や断崖が発達し、験力を獲得するための行場であった。三佛寺の伽藍はさらに、その裾部に設けられている。

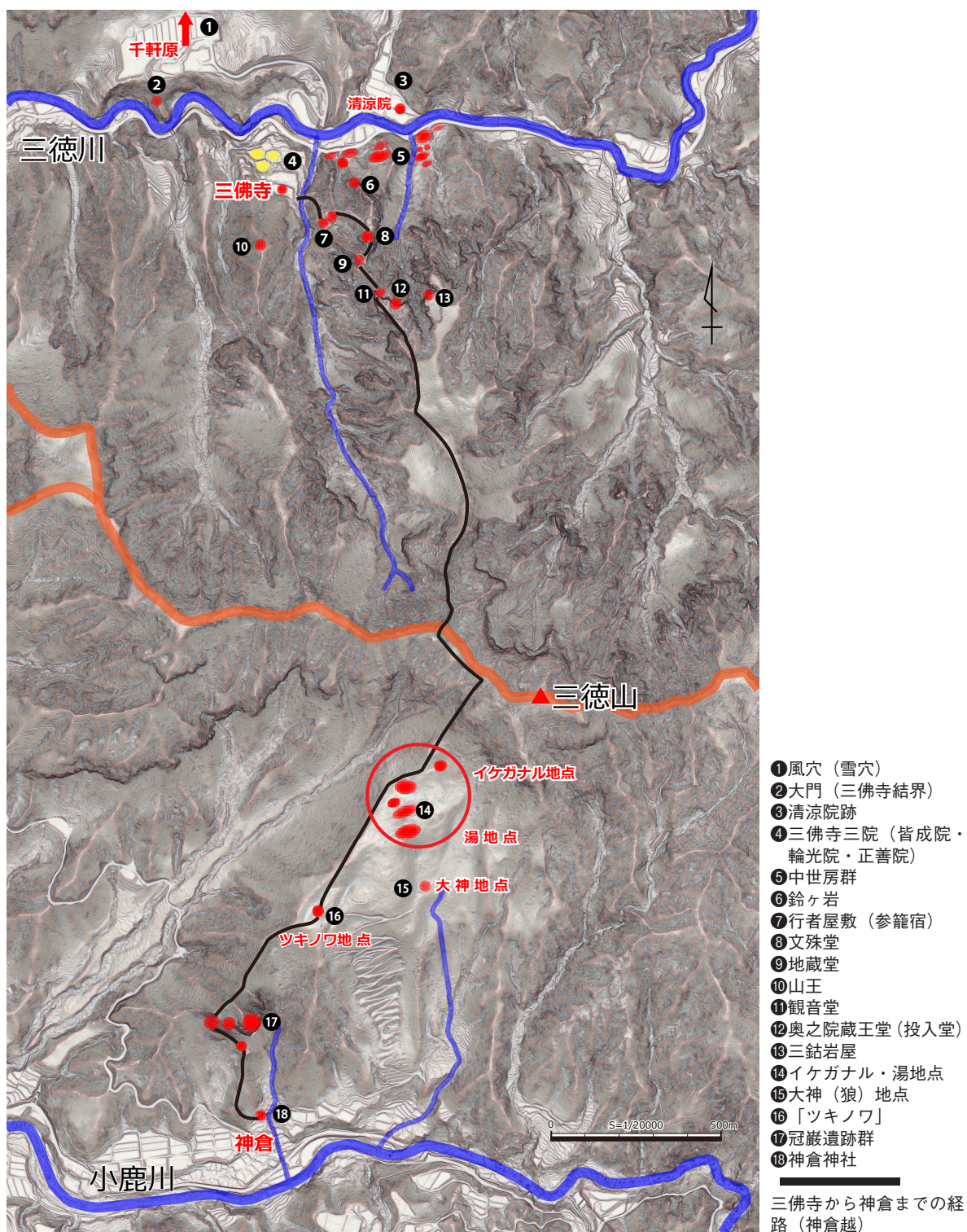


図7 三徳山を中心とする地形とその構成要素

崖や奇岩が集中し、カシ林を優勢とする樹相が覆う。ここは験力を獲得するための行場であり、その末端の三徳川に面した裾部に三佛寺の寺房や堂舎が設けられた。

南面の神倉側では巨大な断崖で磐座でもある かんむりいわ 冠巖は凝灰角礫岩末端が浸食を受けて断崖となったもので、その裾部には人工平場が造成されている。これは宝殿を伴う祭祀場を想定しており、神倉集落最上部には村鎮守の神倉神社（山王社）が設けられている。

3 歴史的環境

縁起 三徳は初期の史料には「美德」と記される。山岳霊場としての三徳の開山伝承⁽¹⁾には「慶雲3年(706)に役行者が三弁の蓮華を空中に散じて、願わくばこの蓮華仏縁有縁の勝地に落つべしと念じ、一弁が大和吉野山に、一弁は伊予石鎚山に、一弁は伯耆三徳山に止まり、この地に堂宇を建立し金剛蔵王権現を勧請した」のが始まりとされる。

同様の内容は奈良県吉野の金峯山寺に伝わる『金峯山草創記』にも記される。この史料は鎌倉時代後期にまとめられたもので、冒頭に計六種の縁起や伝承が記載され、このうち五番目に石鎚山(石土山)・金峯山(弥勒長)・三徳山(三仏山)の三山を千光仏浄土・大光仏浄土・無量光浄土であるとして位置づけている。残る石鎚山にもこれに関連する『石土山縁起』というものが残されており、こちらは石鎚山麓に所在する横峯寺という四国八十八箇所霊場六十番札所に伝わる江戸時代の写本であるが、根本の成立は中世に遡るとい⁽²⁾。これら共通する縁起の存在は金峯山と石鎚山・三徳山の三山が単独で存在するのではなく、金剛蔵王権現を祀る一連の霊山、山岳霊場としての性格を有したものであったことを示している。

蔵王権現の初出は長保三年(1001)の紀年銘を刻んだ国宝に指定されている蔵王権現鏡像で、これは朝廷の内匠寮で製作され、金峯山山上本堂に祀られた大型鏡像⁽³⁾であり、史料上の初出は藤原道長が寛弘四年(1007)に金峯山上に造営した我国最初の経塚に納められた青銅経筒紀年銘中の「蔵王権現」であることから、10世紀末が成立期ということになる。インド発祥で中国経由の仏菩薩に対して、権現は日本で創出された神号であり、しかも特定の山の山神ではなく、日本国土全域を守護する権現として朝廷主導で創られた日本独自の尊格である。これは大和金峯山を中心にして遠国土佐国と中国伊予国境に位置する石鎚山脈は瀬戸内海海路に対する結界守護として、近国因幡国と中国伯耆国境に位置する美德は日本海海路に対する結界守護として配置されたものと評価することができる⁽⁴⁾。

御室仁和寺末としての美德山 真言宗御室派の総本山である御室仁和寺には『仁和寺諸院家記』という仁和寺各院家の沿革・草創を記した史料が残り、伯耆国の項には「長隆寺、今熊野、美德山清令寺」という三箇寺の末寺が記されている。鎌倉時代末期に成立した『大山寺縁起』には「美德山の子守・勝手・蔵王堂・講堂・清涼院の残り無くこそ焼き払ひけれ」と清涼院(清令寺)の名が登場することから、鎌倉期には山内に清涼院が存在し、しかも一院だけが挙げられることからすると、一山を代表する別当寺であり、それが真言宗御室寺の直末であったことを示している。さらに清涼院の跡地(図7③)には現在、奥之院蔵王堂(通称投入堂)の展望所が設けられており、この地点からだけ蔵王堂が直視できるという位置関係にあることを勘案すると、清涼院が奥之院蔵王堂の建立に密接に関わっていた可能性が示唆できるだろう。蔵王堂は年輪年代測定法による古材の年代測定の結果、1110年直後に創建されたことが判明している⁽⁵⁾。御室

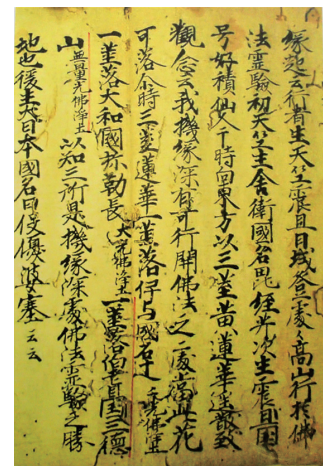


写真1 『金峯山草創記』
該当部分



写真2 奥之院蔵王堂

仁和寺は光孝天皇（830－887）の御願寺として造立を始めるが途中で崩御されたので宇多天皇（867－931）が父の意志を受けて完成させた御願寺で、延喜元年（901）に東寺の益信より伝法灌頂を受け真言阿闍梨となり、仁和寺内に御所（御室）を設け初代の法皇として宗教界全体を把握しようとした。宇多法皇は昌泰3年（900）7月と延喜5年（905）9月に「御嶽精進」と呼ばれる金峯山登拝を行って山上において大規模な法会を行い、翌年（延喜6）には東大寺別当で醍醐寺を開いた真言僧の聖宝（832－909）が金峯山上に本堂を建立したと伝える。このように金峯山と仁和寺の関りには深いものがあり、その直末が美徳山清涼院（清令寺）であることは注意しておく必要がある。三徳山に関しては、これまで天台宗からの視点でのみ語られてきたが、真言・天台両宗兼帯の山岳霊場というのが実態であった。



写真3 三佛寺最古の蔵王権現像
年輪年代測定法により1025年伐採材使用と判明。



写真4 三佛寺蔵王堂正本尊
1165年の伐採材を使用し胎内納入文書から仁安三年（1168）仏師康慶作であると判明。

中世の盛衰 平安時代末に一山は隆盛し、政治的な抗争や社会の変動に巻き込まれ衰退と再建を繰り返したので史料も殆んど残されていない。『大山寺縁起』には大山寺三院間（中門院・西明院・南光院）⁽⁶⁾の紛争に対し、三徳山の門徒が南光院側に加担したことから報復として、他の二院が三徳山に押し寄せ、諸堂を焼き払ったことを記す。

三徳山は鎌倉幕府や室町幕府の配置した伯耆国守護等の崇敬を受けて保護され再興を繰り返したと考えられるが、寺領についての史料が明らかになるのは鎌倉時代末から南北朝にかけてで、康永3年（1344）の検注取帳（壬生文書）等により四至が「東は因幡国気多郡との境、西は三徳川と小鹿川の合流地域、南は小鹿谷、北は三徳川流域」という未開発の山域で占められており、これに「温谷別所」と「小鹿東別所」の二別所が存在したことがわかっている。美徳山領は官務を世襲した壬生家⁽⁷⁾に寄進された寄進地形荘園という性格を有していた。

寺伝によると美徳山領は三千石を有していたというが戦国末期になると伯耆羽衣石城に居を構えた南条元統が従来の寺領のうち一部となる五百石の安堵を行い、堂社11宇、坊舎12軒を再興したと伝える。

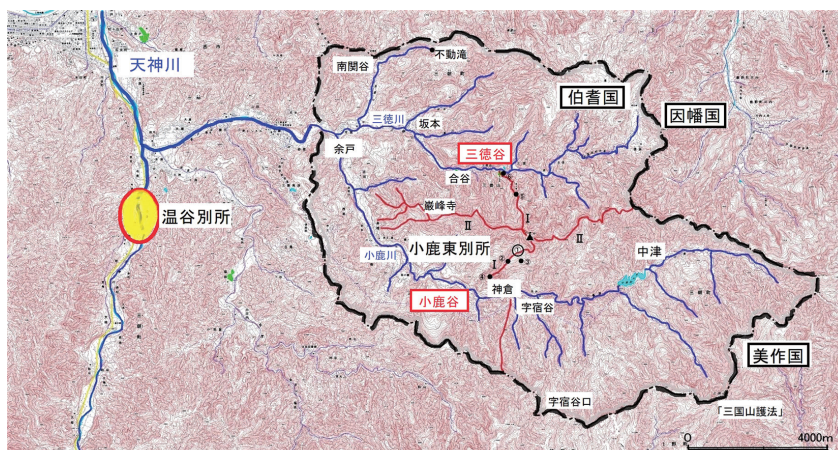


図8 美徳山領概念図

中世の美徳山領は現在の三朝町域の半分近くを占め、山並の主稜線により隔てられた荘域の多くが三朝町の行政境に踏襲されている。標高899mの三徳山塊を挟んで南北両側に谷が入り込み、北側は三佛寺を中心とする三徳谷、南側が小鹿東別所・神倉を中心とする小鹿谷の二谷からなりたっている。

近世の三佛寺 江戸時代初めの三佛寺は三千石の朱印地を保証された大山寺の支配下に置かれ、慶安2年（1649）には初代鳥取藩主池田光仲が鳥取城下に設けた東照宮の別当、淳光院（のち大雲院と改称）の末寺となる。淳光院は天台宗東叡山、寛永寺の直末寺で、三佛寺はその配下に置かれ、百石の朱印地を保証されていた。

4 『伯耆民談記』に記載された山岳修験霊場としての姿

三徳山に対する一般的なイメージは「修験道の山」「山岳修行の霊場」というものではないだろうか。ところが現在の三徳山では、三佛寺境内で本堂奥の「宿入橋」から奥之院蔵王堂（投入堂）までの参詣道が山中修行の経路であることに加え、奥之院が修験道の主尊である金剛蔵王権現を祀る以外は特に修験道色が見られるわけではない。それは江戸時代に確立する三佛寺が藩主の安寧と藩領の平穏を願う天台宗の寺院であり、山内に修験者が居住し、山中修行を行なう霊場ではなくなっているからであった。

江戸時代中期の寛保2年（1742）に成立した地誌『伯耆民談記』には中世の三徳山での山中修行及び修験活動を記す数少ない記述がみられ、これを右に抜粋した。要点は次の2点である。①「（三佛寺側では）子守・勝手・蔵王の三所権現を祀り、神倉には（熊野）新宮を、余戸（淀）には本堂（本宮か）をそれぞれ置き、本地仏は薬師如来である。合谷には峰の薬師を祀り、南関の谷には不動滝を開き（美徳を）伯耆国の国峰修行の霊場とする。国内の修験（山伏・聖）達は毎年秋にここに集まり修行に励んだ、その行いは大和国大峯を移したものである。」②「神倉とは村の名であり美徳（三佛寺）よりさらに奥の山里で、そこは数キロにも及ぶ岩山である。その中には大きな洞窟があり、そこに経典を納めたという言い伝えがあるが、洞窟を見た人もなく、ただの言い伝えである。」つまり、三徳谷奥に位置する三佛寺山内には吉野金峯山の蔵王権現を主尊とする三所権現を迎え、南の小鹿川奥の神倉には熊野新宮、三徳川と小鹿川が合流する西側の余戸には熊野本宮を迎え、三佛寺入口の合谷には山の神である峰の薬師を迎え、美徳神領北の結界にあたる南関（なんぜき）谷奥に不動滝を設け、美徳山領全域を伯耆国中（もちろん他国からも可）の山伏や聖を志す者の国峰修行を行うための霊場として設定し、それは大和大峯山を中心とする熊野三山・吉野金峯山まで含んだ世界観を、この美徳に移したというのである。この視点こそ美徳を読み解く目線に据える必要がある。

冠巖や神倉神社で行った現地調査は、これまで誰も踏み込むことがなかった美徳の山岳修験世界への扉をこじ開けるきっかけとなった。

5 三徳山神倉の世界

本書で報告する神倉後口山遺跡の性格を明確にするために、神倉地区の構成要素を概観しておこう。神倉は三徳谷の三佛寺側から見ると山頂部に連なる主尾根稜線を越えた（神倉越）小

『伯耆民談記』巻之第七
（前略）當山は文武帝の御宇、慶雲三年役優婆塞山を開き、光仁帝の御宇宝龜年中に、子守勝手蔵王三所ノ権現を安置しテ、都て三十余社を置ク。神倉新宮、淀村に本堂ヲ、各本地薬師なり、合谷に峰の薬師、南関谷に不動瀧を置き国峰とす、伯州の修験等年々秋毎に此の山に入て行法を為す、本所和州の大峰を摸したる山なりといへり、神倉は村名にして、美徳よりは又奥の山里なり、此山数百丈もあらん、岩嶮なり、其嶮中に大なる石窓ありて、其の内に経文を納めありと云ひ伝ふ、然れども探り行かんも人為の及ふ所にあらず、又石窓も見し人も無く、唯口碑に伝ふるのみ也、當山に或人月毛馬に乗つて登山せしに俄かに病悩發し命を失ひしといへり、宝永三丙戌年八月十二日の夜、龍城院の僕又七といふ者、瑞夢を蒙り、山内の地にて、古佛並に佛具銀刀を掘出す、翌年因府に於いて開帳せり、其時に国主も御一覽あり、今に宝物として本堂に有り、其品々左の通り（以下略）

鹿川に至る南斜面一帯を指しており、図9で全域を示した。神倉地区の遺跡群は三佛寺と神倉を繋ぐ唯一の尾根道である「神倉越」に沿って設けられている。

ここに示した4地点（イケガナル・湯・ツキノワ・大神（狼））の呼称は営林署で実際に神倉地区の管理にあたっていた神倉在住の政門利昭さんに同行していただき窺ったものである。

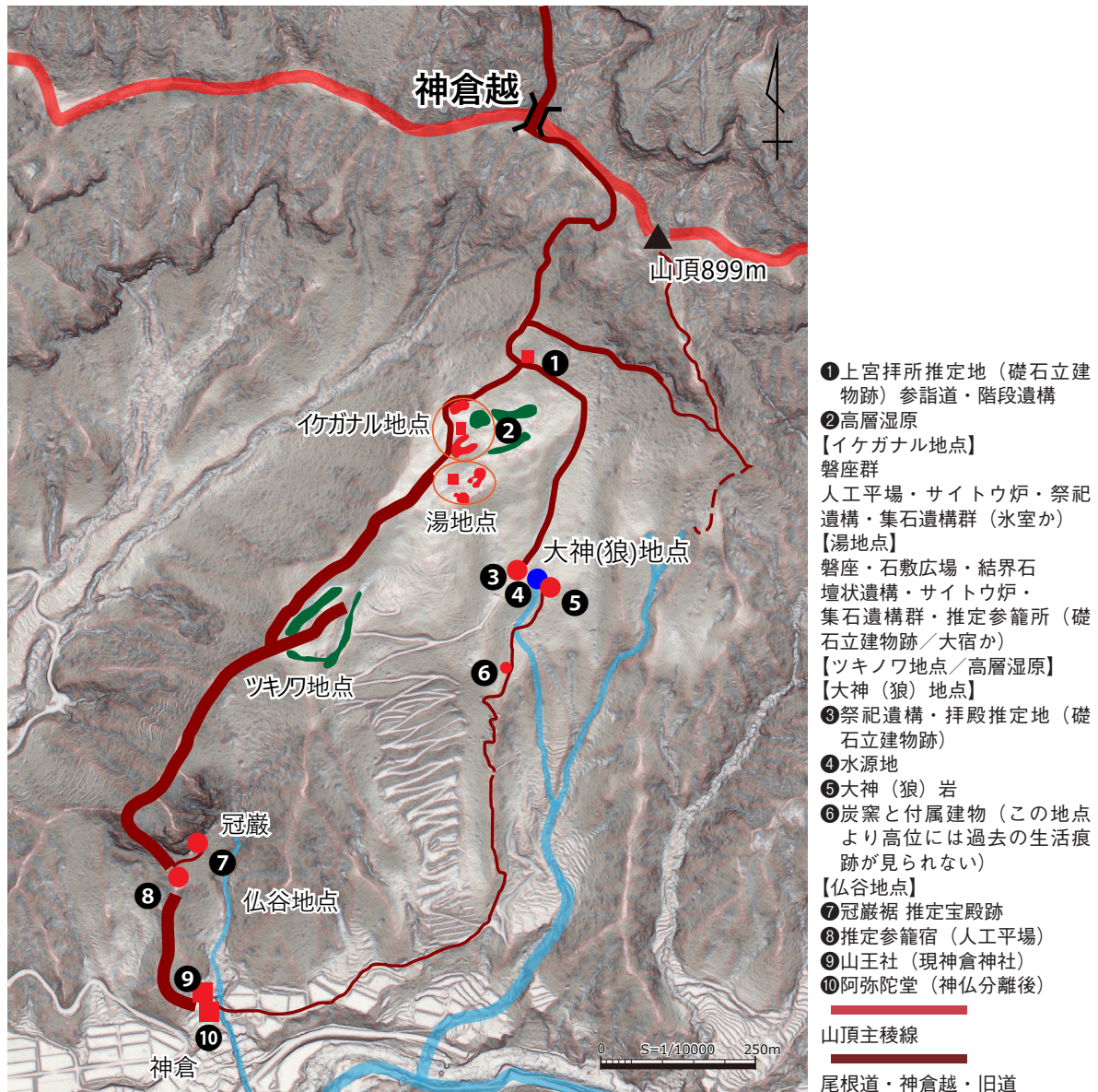


図9 神倉地区を構成する要素

上部から列記すると、標高700mの礎石立建物（山頂を遥拝し拝殿と推定）を伴う人工平場①から660m付近までの高層湿原②の周りに広がる祭祀遺跡と推定氷室（雪穴）群からなるイケガナル地点、その南側に隣接する標高655m前後の鞍部に広がる石敷広場を伴う磐座を核とし、祭祀壇・サイトウ炉⁽⁸⁾・参籠施設等からなる湯地点、これを下った谷頭の標高550m付近の水源地の大神（狼）地点、稜線を下った標高600m付近のツキノワ地点、神倉集落背後の仏谷川に面した



写真5 神倉のランドマーク的存在の「冠巖」

標高320mから400m付近に広がる山王社（現神倉神社）と背後の磐座である冠巖と関連施設からなる仏谷地点が現在までに認識している三徳山南面小鹿谷側の神倉遺跡群である。

仏谷地点には神倉地区のランドマーク的存在の冠巖が聳える。この岩が最も高くしかも前面



写真6 冠巖裾と人工平場
法面に三段にわたり土留め石積が行われている。

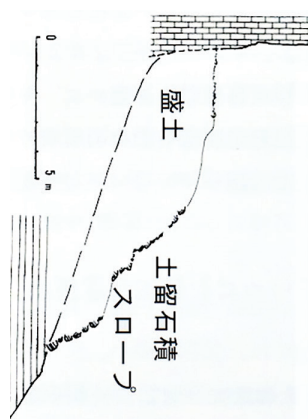


図10 冠巖裾推定宝殿跡

に張り出す部分を選んで断崖裾の谷頭を埋めて人工的な平場を造成し、埋土範囲の法面には三段にわたり土留めの石積が行われている^⑦。このような手の込んだ平場造成を行うのをみると、単なる露天の祭祀場を設けるためとは考えにくく、例えば英彦山や国東六郷山を中心とする豊前平野を取り巻く山中に顕著にみられる、断崖裾の突起部を依代とし、あるいは断崖裾の洞窟や奥壁を山神が宿る神聖なポイントと認識し奥壁剥き出しのまま簡易的に板壁と屋根で覆う宝殿形式の建物（岩屋）が存在したのではないかと推測している。法面の清掃時に9世紀代の高台を貼り付けた須恵器坏身片を採取しており、この場が利用された年代の上限を示している。

神倉地区の総鎮守として神倉集落の背後に鎮座しているのが現在の神倉神社^⑨である。明治初期の神仏分離までは神と仏が混淆する「宮寺様式」の宗教施設で「神倉山王社」と呼ばれ、元禄9年（1696）の棟札を始め平成まで31点の棟札が残る。地区には神倉の山神を表す特徴的な神像も伝わる。一般的な神像は男神と女神の夫婦一対像として表されるのだが、この神像は中央に主尊を置き、両脇に脇侍を配する仏の三尊形式をとりながら、三尊とも腹前に組んだ両手に穴が穿たれて笏を持ち11世紀後半から12世紀に遡るものと考えられている。神像と同時期



写真7 特徴的な三尊形式の神像
主神は衣文を深く刻み頭に宝冠を被る。脇神は山神の使いとしての鬼神の表現が見て取れる異形神像。



写真8 阿弥陀堂内如来像
薬師像の手先を作り変え阿弥陀如来に変更している。



写真9 阿弥陀堂内天部立像

の阿弥陀如来像を中心とする諸尊像が神仏分離時までには祀られていたが、現在は境内隅に簡易な阿弥陀堂を設け、そこに移されて現存する。冠巖は山王社の信仰の根源であり山宮として位置づけることができる。



写真10 大神（狼）地点の水源地



写真11 供物置き場



写真12 大神（狼）岩

大神（狼）地点は標高約590mに所在する水源地④（写真10）を中心にして、その東側傍らには大神（狼）岩⁽⁹⁾と名付けられた花崗岩の大岩⑤が存在する。規模は420×270cm、地面からの最大高200cmで、山道側（西）側面147cmのところに幅25cm、奥行き8cm、奥面での高さ10cm規模の供物置き場を彫り込み、（写真11）その岩上右手には径6～8cm、深さ8cmの華立と思われる円形孔が穿たれていて、これが磐座祭祀の遺構であることが判明した。水源地の反対方向（西側）約90m地点には自然石を最大限利用した祭祀遺構（祭壇）とその前面には拝殿と推定する礎石立建物跡③が存在していて、真正面にはこの大神岩が見える位置関係にある。つまり大神地点というのは水源地を信仰の根源とする空間であり、この上部に所在し参籠を伴う山中修行の拠点道場と推定する湯地点遺構群を成立させた水の供給地で、欠かすことのできない地点と評価することができる。

本書で紹介する神倉後口山遺跡は山麓の神倉集落背後の仏岩地区から上部の広範囲に広がる遺跡である。所在する標高も高く一般の生活遺跡ではなく山岳信仰に関わる遺跡であることは、神倉地区諸遺跡の在り方を見ても納得がいくのではないだろうか。

註記

- (1) 延宝8年（1680）に佐々木盛綱寄進梵鐘を再鑄造するにあたり勧進を行い、これに伴う表白文とされる。
- (2) 吉川聡「石鎚山の縁起からみた蔵王権現信仰」『奈良文化財研究所紀要2015』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所2015年。
- (3) 金峯山で発掘されたものだが明治38年に西新井大師「総持寺」に寄進された。火災により下部が欠失しているが現存部で縦68cm、横76cmの大型鏡像。
- (4) 山本義孝『山岳霊場三徳を読み解く』今井出版2014年 221-226頁。
- (5) 光谷拓実「三佛寺奥院投入堂・納経堂・保管古材・木彫仏の年輪年代調査〈化学分析調査〉」『三徳山総合調査報告書 第1集』鳥取県三朝町教育委員会2014年。
- (6) 大山寺は性格の異なる「谷組織」という三者によって一山組織を形成する。東の西明院谷は「院主」を戴き天台教学中心の学侶が集住、中央の南光院谷は「座主」を戴き聖や修験が集住、西の中門院谷は「別当」を戴き密教僧が集住したと考えている。美徳に拠点を置く聖・修験が同じ階層の南光院谷に加担したということであろう。
- (7) 「管務」とは律令制で太政官弁官局の左大史・右大史の称で、平安後期以降壬生家（本姓は小槻）はこれを世襲し室町末期まで続いた。
- (8) 仏教の護摩は正面に主尊（不動明王など）を祀り、密教僧が炉を挟んで対面し火力によって煩惱や罪過を清める。これに対し山岳修験では屋外で炉上にスギやヒノキの生木を積み上げ、対象物や天に向かって煙を立ち上らせ、これに祈りを乗せる「狼煙（のろし）」という性格が強いので、私は護摩の用語を外しサイトウ（炉）と区別し呼称している。
- (9) 大神（狼）岩はこれまで、岩上に「狼の足跡」と呼ばれる円形堅坑が穿たれているところから呼称されていたが今般の調査で磐座祭祀の場であることが判明した。しかもこの狼伝承は『伯耆国河村郡美徳山並三朝温泉濫觴略記』（三佛寺蔵）の三朝温泉開湯説話中に、但馬国石原山日光院の妙見菩薩の名代として白狼が三徳山で参籠修行を行っていた記載があり、この故事を反映した可能性を持っている。